

Takashi AKIYAMA Poster Museum Nagaoka

2015-07-01

# APM news 131

## 秋山孝ポスター美術館 長岡

歴史的建造物・金庫扉と雁木のある美術館 (旧北越銀行宮内支店)



第28回美術館大学 5月31日(土)pm3:00~pm4:30 / 受講者: 61名

「イラストレーション・ダイアログについて2」 講師: 高橋庸平、小川雄太郎、御法川哲郎、千田昇平、秋山孝

〒940-1106 新潟県長岡市宮内2-10-8  
TEL 0258-39-1233



今回の美術館大学は、4月18日(土)の第27回美術館大学「イラストレーション・ダイアログについて1」に続くものであり、2012年から2014年までに開催した「イラストレーション対話展」の参加アーティスト4名(高橋庸平、小川雄太郎、御法川哲郎、千田昇平)を講師として招き、館長・秋山孝が進行を務めた。

最初に、各回の展示テーマについて尋ねた。小川との展示テーマは「ポスター」。会談中に登場したメタファー(隠喩)という重要なキーワードについて館長から小川にポスターにおけるメタファーとは何かという質問があった。小川は、作者の考えや思いが何らかの形で作品に力を与えることであり、作者が最も伝えたいこと(=メッセージ)をあらわすものである。メタファーのないポスターは思想や芸術性のない、ただの情報伝達であると述べた。

御法川とのテーマは「ポスターの機能と表現」。高橋は御法川を観察し、このテーマを設定した。それは、御法川が会話中に「表現」という言葉を多用すること、御法川がある時期からポスターの情報伝達の「機能」を重要視しているように感じたことから、この二つをキーワードとして選んだという。実際、御法川にとってこの二つの言葉は、ポスターを制作する上で大切にしていることであった。

「命の視点」というテーマを設けたのは千田との展示である。千田は「もの」と「もの」との境界、生きているものとそうでないものの差、共通点を見いだしたいと考えており、高橋はその言葉にならない感覚を感じ取り「命の視点」というテーマを設定した。高橋は命を根拠とした原発問題や時事問題をテーマに制作し、千田は命あるものとそうでないものの「境界」を描き出した。館長は、「命の視点」と「境界」というキーワードには響きあう世界を感じると述べた。

イラストレーション対話展にはどのような気持ちで臨んだかという館長の質問に対して、高橋は相手の作品と自分の作品を並べることにプレッシャーを感じ、また、そのプレッシャーを相手にも与えたいと考えていたと話す。相手を意識したテーマ設定、作品制作は、その時点から相手との対話の始まりであったと回想する。それは小川、千田も同様であった。御法川も同様であったが、彼には更なる思いもあった。2009年から始まった「イラストレーション対話展」は、高橋と一緒に展示してみたいと感じたアーティストに声を掛け、継続してきた。その中で、唯一逆指名を受けたのが御法川であった。御法川は当時、創作上で解決できない問題を抱えていたが、高橋はその部分を軽々と越えたように御法川には感じられた。その後、御法川自身もその問題を解消できたと実感できたときに、改めて高橋の作品と自身の作品を並べてみたいという欲求が生じ、展示を依頼したのだという。

最後に、館長は次のような言葉を私たちに伝えた。作品による対話とは、己が考えている以上に人の心を支配したり、されたりしているものである。思いがけないところで相手のことを評価し、魅力を感じている。身近なところにライバルがいて、お互いに刺激を与え合う、そうした関係がなくてはよい作品は生まれにくい。終わらなげ挑戦、作品による実証を続けながら、創作者の皆が世界で活躍することを願っている。(森山奈帆・APM職員/公式ホームページより抜粋)